

氏名	新田 和子
学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第80号
学位記番号	看博第31号
学位授与年月日	平成30年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	リフレクションを支援する看護師の方略に関する研究 A study on strategies used by nurses to provide reflection support
	主査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学)
論文審査委員	副査 教授 中野 綾美(高知県立大学)
	教授 畦地 博子(高知県立大学)
	教授 田井 雅子(高知県立大学)

#### 論文内容の要旨

目的：本研究は、看護師が行うリフレクション支援とはどのようなものであるかを明らかにすることである。方法：研究協力者は、研究への同意が得られた、後輩の教育に携わる機会の多い病棟棟長、専門看護師、教育担当者を1年以上経験している看護師とし、半構造化面接法を用いてデータを収集、質的記述的研究方法にて分析を行った。本研究は、高知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果：研究協力者は、7～36年の看護経験を有し、管理者、専門看護師、教育担当者を3年以上経験している看護師19名で、語られた場面は21場面であった。分析の結果、看護師が行うリフレクション支援は、対象看護師が、語り考え続けるのを支えるための【専門職者として認める】、対象看護師がどのような体験をしたかについて、沸き起こっていた感情や思考、感覚も含め、対象看護師の言葉でイキイキと語れるように引き出していく【見極めながら体験の語らしめる】、対象看護師が現象を今までとは違う視方で捉えられることを推進する【現象を再構成する】、新たな視点で再構築した現象の認知に基づいた行動を導き出すための【行動に導く】、看護師として未熟な部分や、気づいていない自己の傾向などに自ら気づけるように働きかける【向き合わせる】、対象看護師が感情に激しく揺さぶられる弊害を減らすための【枠を創る】、研究協力者が自身の感情や言動をコントロールし、対象看護師に寄り添い続けることを支える【自分を整える】という7つの方略を用いて行われていることが明らかになった。各方略は、リフレクション支援を効果的にすすめるために使われている技術群と、リフレクションの進展や深まりを見極めるために使われている手がかりによって構成されていた。

考察：これらの方略から、看護師が行うリフレクション支援は、リフレクション支援を行う看護師が、自己を整えながら、対象看護師に寄り添うというケアの基本姿勢をもって行

られる援助であり、対象看護師を専門職者として認め、見極めながら体験を語らしめ、現象を再構成することを促し、行動に導くことで、専門職者としての成長を促すことであり、枠を創りながら向き合わせ、専門職者としての自己を探求することを支援することである、と定義づけられた。また、看護師が行うリフレクション支援を構成する7つの方略は、『基盤となる局面』、『サイクルをすすめる局面』、『深化を促す局面』の、3つの局面から構造化されると考えられた。リフレクション支援を行う看護師は、専門職者を育てる覚悟と責任を引き受け、対象看護師に対しケアの姿勢を取り続け、自己を律しながら臨んでおり、リフレクション支援は、コンサルテーションの問題解決のためのプロセスとは異なり、援助行動の要素が強いことが示唆された。また、対象看護師のニーズを見極めながら、認知に働きかけ、期待される行動に導くために様々な技術を駆使する一方、対象看護師の限界を踏まえながら、対象看護師の内面に踏み込み、あるべき姿に導こうと配慮していることが考察された。

#### 審査結果の要旨

審査委員会においては、以下の点で、学術的にも臨床的にも有意義で独創的な研究成果を導いた博士論文として高く評価した。

本研究は、リエゾン専門看護師として働く新田氏がつ、科学技術の発達とともに、理論知（技術的合理性）が実践知よりも価値あるものとみなされていったことで生じている専門家像や、業務の効率化によるケアの簡略化やルーティーン化、根拠に基づくマニュアル化が主流を占める看護臨床の現状への課題意識に根差した研究である。この課題に、プラグマティズムの教育哲学を源流とするリフレクションという概念に注目し、看護師が行うリフレクション支援を質的に記述することにより明らかにした本研究は、暗黙知とされてきたリフレクション支援という実践知を明らかにする意義と同時に、看護師の実践知を高める教育とはどのようなものなのか、その価値を問い直すという二重の意義をもつ研究であると考えられた。

また、本研究の独創的な発見は、看護師の行うリフレクション支援が、【専門職者として認める】、【見極めながら体験の語らしめる】、【現象を再構成する】、【行動に導く】、【向き合わせる】、【枠を創る】、【自分を整える】という7つの方略を用いて行われていることが明らかになったことである。さらに、各方略は、リフレクション支援を効果的にすすめるために使われている技術群と、リフレクションの進展や深まりを見極めるために使われている手がかりによって構成されていることが明らかになっている。これらの結果は、同じ方略で進むのか、あるいは、異なる方略への切り替えるのか、手がかりを用いて判断しながら、効果的な技術を駆使する、優れた看護師のリフレクション支援の在り方を浮き彫りにしたという点で、学術的、臨床的な意義が大きい。

さらに、看護師が行うリフレクション支援を構成する7つの方略が、『基盤となる局面』、『サイクルをすすめる局面』、『深化を促す局面』の、3つの局面から構造化されると考え

た点も、本研究の独創的な点である。この結果から、リフレクション支援を行う看護師は、専門職者を育てる覚悟と責任を引き受け、対象看護師に対しケアの姿勢を取り続け、自己を律しながら臨んでおり、リフレクション支援は、コンサルテーションの問題解決のためのプロセスとは異なり、援助行動の要素が強いことが考察されている。複雑化、高度化している医療に対応して、より多角的に状況を捉え、臨床判断を行っていかねばならない中、看護師がリフレクティブな思考で実践できることは、より柔軟に迅速に、現場の状況に即した質の高いケアを提供すること繋がっていくと考えられる。看護師が、リフレクション支援を必要とする看護師にリフレクション支援を行う事は、リフレクティブに思考できる看護師を増やす意味で重要で、臨床的な意義は大きい。

審査委員会としては、臨床の場で起きていることに光を当て浮き彫りにすることの重要性が認識されている現在、新田氏の今回の研究成果は、看護の実践家が博士号を有することの意味を痛感するに至った。そして、本研究の成果が、今後臨床に普及していけるよう教育プログラム開発やモデル化など、より発展的に展開する可能性があり、今後の更なる発展に期待するところである。